

## 専任教員教育研究業績

平成29年 4月27日

氏名	ふりがな	所属	職 位	性別
千葉 直紀	ちば なおき	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ <input checked="" type="checkbox"/> 講師・助教	<input checked="" type="checkbox"/> 男・女

小田原短期大学における担当科目名

- ・保育実習指導Ⅰ
- ・保育実習指導Ⅱ・Ⅲ
- ・障害児保育Ⅰ
- ・乳児保育Ⅱ

## 学 歴

和暦（西暦）年 月	事 項	学位
平成14年4月	東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科 入学	
平成18年3月	東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科 卒業	学士（社会福祉学）
平成22年4月	東北福祉大学大学院総合福祉学研究科福祉心理学専攻（修士課程）入学	
平成24年3月	東北福祉大学大学院総合福祉学研究科福祉心理学専攻（修士課程）修了	修士（福祉心理学）

## 教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
社会福祉法人木這子あさひの森保育園	平成18年4月～平成28年3月	保育士
小田原短期大学	平成28年4月～現在に至る	・「実習就職対策」、「保育実習指導Ⅰ」、「保育実習指導ⅡまたはⅢ」「障害児保育」「絵本作成（パネルシアター）」を担当 ・スクーリングにおいて「保育の心理学Ⅱ」「乳児保育Ⅱ」を担当

## 所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）
日本保育学会	平成28年6月～現在に至る	会員
仙台保育問題研究会	平成18年9月～現在に至る	事務局長

## 社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
仙台保育問題研究会	平成19年9月～現在に至る	運営委員
	平成22年9月～現在に至る	事務局
	平成24年9月～現在に至る	事務局長 みやぎの保育編集委員
全国保育問題研究会	平成28年9月～現在に至る	震学習部担当

## 担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
	年 月	

保育士資格	平成 18 年 3 月	宮城県 - 010793 (東北福祉大学)
社会福祉士資格	平成 20 年 5 月	財団法人社会福祉振興・試験センター登録番号: 104413 (東北福祉大学)
	年 月	

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 季刊保育問題研究 (242) 「2人組から集団へ～4歳児Aちゃんについて～」 (pp. 21-26)	単	平成22年4月	新読書社	<p>・ 4歳児クラスに新入園児として入ってきたAちゃん。クラスに溶け込もうと明るく振舞うが、友だちとの関係の形成がうまく出来ず、部屋から出て行ってしまいうこともしばしば。手立てを考え、2人組の当番活動(2人で絵本を選ぶ活動や給食当番など)を通して友だちと関わる機会を作っていくことにした。</p> <p>自分に安心できる仲間や居場所ができたことで、2人での関係性が密になっていき、そこからクラス集団へと関わりが広がっていった。そのようにして、自信を持って生活できるようになっていったAちゃんの心の変化を考察した実践。</p>
2. 季刊保育問題研究 (268) 『保育におけるあそびびとの奥義』 「ぶちゴマで感じ合う子どもたちと共に」 (pp. 45-55)	単	平成26年4月	新読書社	<p>・ 4歳児でのぶちゴマ(ひもで叩くコマ)あそびの実践。コマ作りの作業1つ1つから面白さを見つけ出そうとする子どもたち。子どもが活動のどこを面白がっているのかという理解なしにはむやみに進めることはしない。また、活動に興味がなさそうに見えても、本当はやりたいと思っていることがある。表面上の行動だけでは読み取れない心の動きを捉えることの重要性を示唆した。</p> <p>活動の中で、又は生活の中で子どもがどこに困難さを抱えているか。そのことを理解し寄り添い、大人が分かちあげることから子どもが行動を起こしはじめ、自己効力感が育っていく。その大切さをまとめたもの。</p>
3. 季刊保育問題研究 (278), 「仲間と感じ合って育つ子どもたち：保育のその先にあるものを追求して」 (pp. 112-115)	単	平成28年4月	新読書社	<p>・ 民俗舞踊荒馬(青森県今別町に伝わる踊り)を保育教材とし、5歳児クラスにおいて年間を通して荒馬を作って踊った。子どもたちの中には年長になっても自己効力感を持つことが出来ないでいる子がいる。そのような子に対し、大人の褒めや認めがあれば安心感は構築されても、自信にはならない。自分自身を認め、求めてくれる仲間が必要なのである。仲間が認めてくれるような一言。遊びの中での行動、当番活動を通して。「自分」という存在の尊さを実感する中で育ちあっていく子どもたち。そのことが生きていく上で、また、幼児期において重要であることを提案した。</p>
4. 季刊保育問題研究 (282), (pp. 128-131) 園縁宴 保育の輪 「"ありのままでもいい"という	単	平成28年12月	新読書社	<p>・ 保育者として勤務していた自身の体験から、「子どもを捉える視点」について私見を述べたもの。また、学生に対しての講義についても同様の捉えができるという発見をし、人として関わっていく保育者・教師の姿勢が現代の教育にとって重要であることを述べている。</p>

<p>こと」</p> <p>(口頭発表)</p> <p>1. 「2人組から始まる集団作り」</p> <p>2. 「仲間に認められながら育つ子どもたち～保育のその先にあるものを追求して～」</p> <p>3. 「仲間に認められながら育つ子どもたち～保育のその先にあるものを追求して～」</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>平成22年6月</p> <p>平成27年6月</p> <p>平成28年6月</p>	<p>第49回全国保育問題研究集会(福岡集会) 集団作り分科会提案</p> <p>第36回宮城保育団体合同研究集会 就学を迎える5歳児分科会提案</p> <p>第55回全国保育問題研究集会(東京集会) 集団作り分科会提案</p>	<p>・4歳児クラスで初めて大きな集団に入ったAちゃん。2人組の当番活動を通して関わりが深まり、集団の中のびのびと自分を表現できるようになっていった実践提案。</p> <p>明るく振舞うAちゃんの行動には自信の無さがあった。そこで、仲間との関わりを意図的に作っていくことで意欲的に生活し、自己肯定感を持つことができるようになった姿を考察した。</p> <p>・民俗舞踊(荒馬)を保育教材としてとりあげ、荒馬製作と踊りによって仲間との関わりを深めていく取り組みの提案。幼少期における仲間との深い関わり合いや喜び合う経験が最も重要であることを示唆した。</p> <p>・内容は同上</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. 青年期における拒否不安とアタッチメントスタイルから見る友人関係～友人関係の構築とその背後にあるもの～</p> <p>2. 「保育者の早期離職を抑制する要素の抽出～ベテラン保育者の職業継続の要因から見えてきたもの～」47, (pp.129-141)</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>平成24年3月</p> <p>平成29年3月</p>	<p>修士論文</p> <p>小田原短期大学紀要</p>	<p>・大学生に対して質問紙調査を行い、アタッチメントの型(安定・回避・アンビバレント)の分類を行う。その型が友人関係の構築の仕方に対してどのような影響を与えているかを検討した論文。また、現代社会において他者から拒否されることを異様に恐れる「拒否不安」というものがアタッチメントの型とどう相互作用するのかを調査したもの。</p> <p>結果、アタッチメントと拒否不安それぞれが友人関係の構築に対して強い影響を与えていた。そのアタッチメントは乳幼児期に形成される。乳幼児期に誰とどのような関係を構築してきたかということが青年期における人間関係にまで影響を及ぼすことを示唆した論文である。</p> <p>・本研究は保育者の早期離職問題に対して、辞める要因ではなく辞めない要因。つまり、継続要因を明らかにしていくことである。</p> <p>ベテラン保育者に対する面接調査によって保育者継続の要素が抽出された。その3つは「子どもを捉える視点」「保護者の存在」「保育者同士の仲間意識」である。この3つの要素が保育者継続に大きな影響を与えていることが明らかとなった。</p>

<p>(その他)          &lt;保育現場経験          10年&gt;          あさひの森保育園</p> <p>&lt;統合保育&gt;          あさひの森保育園</p> <p>&lt;クラス運営の          方法&gt;          あさひの森保育園</p> <p>&lt;保育現場におけ          る実習生の指導&gt;          あさひの森保育園</p> <p>&lt;保護者との          関わり&gt;          あさひの森保育園</p>				<ul style="list-style-type: none"> <li>・1歳児から5歳児年長まで、0歳児以外のすべてのクラスを経験(2歳児、2歳児、4歳児、フリー保育士、3歳児、1歳児、1歳児、4歳児、5歳児、フリー保育士の順で経験)。</li> <li>・3年目には4歳児クラス統合児(広汎性発達障害児)、(自閉症で食物アレルギーを持つ児)が在籍するクラスを受け持つ。</li> <li>・4年目にはフリー保育士として4歳児クラス統合児(最重度の知的障害を伴った自閉症児)を担当し統合保育リーダーを経験。統合児の行動理解やクラス集団との結びつきについて担当保育者同士が会議を持ちながら進めていった。</li> <li>・未満児クラス(1歳児)ではわらべうたを用いた遊びを生活に取り入れながら、子どもが大人との関わり(愛着形成)を深められるように意識しながら働きかけを行った。そのことがきっかけに子ども自身も他児へ目を向け、関わりを楽しむようになっていった実践。また、発達の的に気になる子に対して、子ども自身の行動や表現していることがどのような意味を持っているのかクラス内で検討し合い、保護者にも対応していった。</li> <li>・3歳児クラスではクラスを少人数に分ける保育やごっこ遊び、2人組の当番活動を通して友だちと関わりを深めるよう実践。</li> <li>・4歳児クラスではぶちゴマを1人1人が自分で作り、その作業の過程やあそびの中で仲間関係を深めていく実践を行った。また、1年間を通して遊びこむことでクラス全員がコマを回すことができ、自己肯定感にもつなげることができた。</li> <li>・5歳児年長クラスでは民舞・荒馬を通して仲間関係をさらに深め、仲間の中で認め合える関係性を作っていた。また、親を巻き込んで荒馬を製作することで親子での関わりも深めながら安心して就学できるように働きかけを行った。</li> <li>・H18～27年3月まで「保育実習Ⅰ」の学生(1日～数日)の指導を数名行う。また、「保育実習Ⅱ」の学生(2週間)をこれまで4名指導した。          実習指導においては、子どもと関わって感じたことを実習生から語ってもらいながら、子どもと接した時の声掛け、戸惑いなどを実習生自身が認識して子どもと関わっていけるように指導を行った。また、全日実習においては活動のねらいを明確にししながら、計画・実践することができるように指導を行った。</li> <li>・子どもの普段の姿を日々保護者に伝えながら、子どもの行動理解を保護者と共に行っていくことができるように配慮した。方法としては、おたよりや保護者参観、懇談会などでクラスでの取り組みを理解してもらうように働きかけ、園での姿と家庭での姿を通して子ども理解ができるように留意して行った。</li> </ul>
<p>その他 (表彰等)</p>				